

## 姉崎正治による東大図書館復興とその背景

手戸 聖伸

はじめに

本稿の目的は、1923年の関東大震災で崩壊した東京帝国大学附属図書館再建に図書館長として当たった姉崎正治（1873～1949）の図書館行政を、当時の日本とアメリカがおかれていた状況とのかわりのなかで理解することである。

関東大震災のために全壊した図書館の復興については『東京大学百年史部局史四』に収められた「附属図書館」の章で、その経緯が跡づけられている。そこには次のようなくだりがある。

図書館は関東大震災のためにその建物は炎上全壊、その蔵書はほとんど焼失という致命的な打撃を受けたが、またこれによって新しい発展段階を迎えることになる。復興は、まったく国の内外からの援助によるものであったが、とりわけ、現在もなおいささかのゆるぎをみせない建物がアメリカの実業家 John D. Rockefeller, Jr. の寄付によるものであったことは記念されなければならない。(1)

けれども、ここではロックフェラーがどうして寄付を申し出たのかといったことは明らかにされていないし、初代図書館長の姉崎がどのような形で復興にかかわっていたのかも明らかにされていない。

ところで、実はこのロックフェラーからの寄付は、姉崎が図書館長であったことがひとつの大きな理由だと目されている。姉崎じしんが回想のなかで、友人の兄弟がロックフェラーとつながっていたことをもらしている。(2) 姉崎図書館長のもとで司書官を務めていた水野亮も次のように述べている。

…震災があつて、そのあと始末をするため

に姉崎先生が館長になられた。そしてしばらくするとロックフェラーから四百万円の寄付申込みがあつた。もしこのとき姉崎先生が館長でなかったならば、ロックフェラーにしても果たしてそれだけの金をくれたかしらん。…姉崎先生のような、国際的に名前の知れている学者で、おまけに外国の儀礼慣習にも通じておられる方が、たまたまそういうときに東京大学におられた。…ロックフェラー、あるいはロックフェラー財団がこの人ならば安心して金を預けることができる、むだ使いはすまいと、そう考えたのだらうと思うのであります。(3)

だが姉崎の回想も水野の回想も、寄付にまで漕ぎつけるのにどのような折衝が具体的にあったのかという点については明らかにされていない。これについては、男澤淳が図書館復興から50年後に編まれた東京大学附属図書館編『図書館再建50年』に収められた論文「図書館復興と姉崎館長」のなかで論じている(4)。男澤の論文は東京帝国大学が編んだ『図書館復興事業』や、再建費寄付者のロックフェラーとのあいだに交わされた書簡集 Rockfeller Documents (Documents Concerning the Rockfeller Donation Leading up to its Consummation) (5)などを参照して、姉崎とロックフェラーのあいだにどのようなやりとりが交わされたのか、例を引きながら震災から再建までの経緯を辿ったものである。だがここでも姉崎のもっていた国際性への言及はあるもののその一端を開示するにとどまっており、彼が具体的にどのようなネットワークをもっていたのか、図書館復興をどのように当時の国際的な文脈に置き直してみることができるのかといったところには

筆が及んでいない。本稿はこれらの業績を参照しつつも、まだ残されているこのような課題に応えていこうとするものである。

というのも、宗教学の初代教授でもあった姉崎正治の身の資料が東京大学宗教学研究室のもとにあって近年その整理が進められているのだが、そのなかで上記の課題に応えられるような資料が浮かび上がってきたからである。「姉崎正治関連資料」(仮)<sup>(6)</sup>のなかにある図書館行政のセクションに分類される資料、ならびに「姉崎発・姉崎宛欧文書簡集」(仮)<sup>(7)</sup>のなかの書簡がそれである。これらの資料を用いることで、東大図書館復興の経緯を当時の国際状況という背景とともに描き出すことが可能になってくる。ロックフェラーからの出資の理由を考察することでみえてくるのは、雲ゆきの怪しくなっていく日米関係のなかでそれをなんとか押し留めようとする日米の知識人や経済人のネットワークである。このようにみることによって震災後の復興事業という東大図書館史のひとつは、より広いパースペクティブのもとに位置づけられることになるだろう。

ところで本稿がこのような形で姉崎正治に焦点を当てようとするのには、以下のような事情がある。近年、様々な学問分野においてみずからの営みが行われている「場」とでも言うべきものを問いただそうという動きが活発で、宗教学もまたその例に漏れず、この学問が成立した文脈を見直すことで今まで自明とされていた傾きのある諸前提を可視化しようという動きがある。そのとき学問上の枠組みを打ち建てた人物の学問上の業績のみならず、その行政手腕などにも注目する必要が出てきている<sup>(8)</sup>。姉崎正治と言えば図書館長という以上に、1905年に東京帝国大学に宗教学講座が設けられたときの初代教授であり、日本における宗教学を学問的に基礎づけた人物である。本稿はそういった人物を学問上の業績とは違った角度から取り上げることを意図している。そのことによって姉崎正治という人物をより総合的に見直すひとつの足がかりともなればと思う。

#### 関東大震災と姉崎図書館長

1923年9月1日に起こった関東大震災で東大図書館は崩壊<sup>(9)</sup>、その蔵書もほとんど燃えた。医

学部医化学教室から出た火が薬物学教室に燃え移り、その火の手が風に煽られて、屋根瓦がずり落ちてばかりと大きな口を開けた図書館に入ってしまった。そして10分ほどでほとんどの本を焼き尽くしたのである。

本は何冊くらい燃えたのだろうか。実はその数には様々な説があって定かではないが、男澤淳は以下のように諸説を検討している。

たとえば、『東京毎日新聞』(大正12・11・29)では85万冊、ロックフェラーへ伝わったのが80万冊(寄附電文中にある)、『東京帝国大学五十年史』では76万冊(下冊p.1117)、『東京帝国大学学術大観』では60万冊(「総説・文学部」p.127)、ところが当初、震災後はじめて開かれた9月27日の図書館協議会に和田館長が報告したのは50万冊であった。<sup>(10)</sup>

そのうえで「約56~7万冊。従来焼失図書数についてはさまざまな数字が見られるのであるが、おそらくこれが最も実際に近いものと思われる」<sup>(11)</sup>と述べている。

震災が起こってから半月ほどたった9月17日に国際連盟で東京帝国大学図書復興援助の決議がなされ、各国から図書の寄贈や資金援助がなされた。たとえばイギリスでは大英学士院に復興援助の特別委員会が組織され、また議会も40万ポンドの援助を可決した。国内からも申し入れがなされた。紀州徳川家の南葵文庫、河本文庫、木内文庫などがそれである。<sup>(12)</sup>

学内の方でも壊れた図書館を再建すべく、図書館復興委員会が組織される。委員長には当時法学部の長老教授だった山田三良が就く。そして彼は法学部・経済学部の教授をそれぞれ一名ずつ海外に派遣して図書の買い付けをはじめ。アメリカ方面に送ったのが法学部教授の高柳賢三で、彼はのちに姉崎を襲って図書館長に就任する。もうひとりには経済学部教授の上野道輔でヨーロッパ方面を担当した。また洋書部門の司書官として仏文助教授の山田珠樹が就任した。このような状況のなかで1923年11月それまでの和田館長に代って姉崎が図書館長を務めることになる。

後年姉崎は、地震のあった「その年の十二月に

ロックフェラーから四百万円の寄附をするという事で、実におどりが上がったのである」<sup>(13)</sup>と、1923年12月に早々とロックフェラーから寄付があったような回想をしている。だがこれは思い違いで、寄付は翌1924年の12月である。アメリカ方面を廻っていた高柳が災害の状況をロックフェラーに伝え、ロックフェラーが財団からラッセル一向を1924年6月に姉崎のもとに送って、図書館仮事務室で話し合ったというのが最初の接触である。

#### ロックフェラーの400万円

さて、ジョン・D・ロックフェラーといえばスタンダード石油の2代目で、言わずと知れた大富豪である。このロックフェラーこそ、関東大震災で瓦解した東大図書館の再建のために400万円を寄贈した人物であるが、このロックフェラーに寄付を勧めたのが、どうやらアーサー・ウッズとジェームズ・ウッズの兄弟だということになっている。ジェームズの方はハーバードの仏教研究者で、姉崎とはドイツ留学の際にドイツセン教授のところを知り合ってから、震災の時点でかれこれ20年以上の付き合いである。その間、姉崎をハーバードに招聘したこともある。そしてアーサーは、ロックフェラー財団の顧問弁護士であった。ここに見えるのは、東大図書館の窮状を歎く姉崎の声がジェームズに届き、アーサーを通してロックフェラーにはたらきかけて金を捻出してもらったという構図である。姉崎じしん「多分ウッズの弟の方を通して、ロックフェラーの話がきこえたのである」<sup>(14)</sup>と回想している。

1924年6月にラッセル一向が姉崎を訪れ、半年ほどのやり取りを経て、同年12月にジョン・D・ロックフェラーが400万円出資の電報を打つことになる。ところでこの400万円という額はどのような経緯でこう設定されたのだろうか。これぞという決定的な確たる証拠は実はないのだが、それでいくつかの判断材料から妥当とおぼしき理由を推測することはできる。ここではともかくも6月から12月までの足取りを辿ろう。

まず、ラッセルに提供された1924年6月時点の復興計画にはこうある。

本の買いつけ

50000〔円〕 経常支出

50000〔円〕 余剰経費 1923-24年  
150000〔円〕 余剰経費 1924-25年(見込)

図書館建築

第1期 1000000〔円〕 向こう4年間

第2期 1000000〔円〕 さらに2年間

100万円あれば第1期の建築は1年半でできる<sup>(15)</sup>

すなわち、本の買いつけについては、経常支出から5万円歳出し、1923年から24年にかけての余剰経費を利用して5万円、さらに1924年から25年にかけて同様に余剰経費から15万円利用することを見込んでいる。図書館建築については向こう四年間のうちに100万円を集め第1期の工事に着手し、さらにその先2年間でもう100万円集めて第2期の工事を終えるというものである。そして、100万円手元があれば第1期の工事は1年半で終わる計算だと述べている。

8月9日にジェームズ・ウッズに書き送った手紙では、姉崎はラッセルとの会見で確認したことをまとめながら、再建計画を述べているのだが、これが先の表といくらかずれている。

援助の見込みについてラッセル氏と私が話し合ったとき、まず向こう4年間で100万円、さらに4年間で100万円充ててもらうことを二人で確認した。こうすれば向こう8年間で200万予算をつけてもらって図書館を完成することができる。けれども新内閣が財政削減政策を新しく打ち出したためいまや状況は変わってしまった。私たちが把握しているところでは、工事着手はどうしても1926年の4月からになりそうだということである〔そうすると完成は1934年の計算になる＝引用者註〕。…ラッセル氏は、たとえば200万の寄贈があれば完成した図書館がいつできるかと聞いてきた。それには1年半だと答えた〔つまり寄贈があれば1926年中に完成する計算になる＝引用者註〕。<sup>(16)</sup>

ここで姉崎は寄附が即金であるかないかで完成に8年もの開きが出てくることを仄めかしている。そしてさらに、もし200万円の寄附がもらえても図書館は増築できるよう、建築予定地の3分の1くらいに建てておくようにしておいて、あとは政

府からの金で増築していこうと思うと述べて<sup>(17)</sup>、最終的な完成にはもっと金がかかることを示唆している。

8月23日に外務省の総領事の斉藤<sup>(18)</sup>という人物に姉崎が書き送った手紙にはもっとはっきりとこうある。「費用は200万円と見積もられている」。だが「増築でさらに200万円かかるだろう」。そして「焼けた70万冊ほどの本を取り戻すには300万円と見積もられている」と。<sup>(19)</sup>

ただこのあたりの計画はどこまで綿密に煮詰められたものなのかはよくわからない。たとえば9月15日に外務省に宛てた東大総長古在由直の手紙には「完成した図書館のためには300万円」<sup>(20)</sup>となっているからである。

ともかくこの頃までには4年以内に政府予算130万円がつくことが決定しており<sup>(21)</sup>、それはロックフェラーにも伝わっていた。

そこで12月の電報で、ジョン・D・ロックフェラーは、図書館の建築費としてかかるのが400万円政府からは130万出るということを自分は聞いている。そこで自分は400万出すから、これが建物の完成と本の買いつけに利用してもらえればと思う。その際400万の使い道は古在由直と姉崎正治、それに元工学部助教授で三井財閥の総帥・合名理事長である国塚磨にお任せする、と書いている。<sup>(22)</sup>

ジョン・D・ロックフェラーはこのように言うて、気前よく400万円を放り出すのであるが、これにはこれで理由がある。先にとりあげた1924年8月9日付の姉崎からジェームズ・ウッズ宛の書簡には、寄付金をどうもらうかについての考えが述べられている。以下その大意を記そう。

寄付金をいただくとしてその段取りには2つの方法があると思う。ひとつは現金で一気にいただくというもの、もうひとつは図書館ができるまで歳出していただくというものだ。後者の方が便利だとは思う。前者でやっていて足りなくなって政府の支出を頼ることになったらそれがはたして円滑にいくかどうか不安があるからだ。けれども後者の方にも問題がある。というのは歳出が続くと、反米感情をもった立場の人間がアメリカ資本の投下ということで反対を起すかもしれないからだ

[日本国内にあった反米感情とはその年にアメリカで成立した移民法の問題にかかわっているのだがそれについては後述しよう]。それを考えると一気にもらっておいた方が彼らを黙らせやすい。<sup>(23)</sup>

最後まで歳出プロセスにつきあってもらうか一気に出してもらうかで逡巡してみせながら、図書館をきちんと完成できるだけの金額を一気にいただきたいとも読める本音をちりちりとぞかせて、価格交渉を優位に進めようという姉崎の外交手腕がここには光っているように思われる。そしてこれは、責任を請け負って歳出し続けるよりも一気に寄付をする方がよいと考えていたのではないかと推察されるロックフェラーの心理にも通じているから、なおさらそうなのである。

#### ルーヴァン大学図書館

ではその心理はどのように形成されたとみることができだろうか。その一端は、東大図書館再建事業に先立って行なわれていたルーヴァン大学図書館の再建事業に求められるのではないかと思う。以下ヴォルフガング・シヴェルプシュの『図書館炎上—二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館』を参考に、ルーヴァン大学図書館再建の経緯を述べ<sup>(24)</sup>、東大図書館再建に対するロックフェラーの態度について考察してみよう。

1914年8月25日、ベルギー、ルーヴァン。この街は数日前に押し寄せてきた第一次世界大戦の戦火にまみれて、プロイセン・ドイツの占領下にある。そしてこの日、ドイツ軍はルーヴァン大学図書館に火を放つのである。そしてルーヴァンは炎上した図書館として、戦災と震災の違いはあるにせよ、東大図書館の先例となっていた。

ルーヴァン図書館の破壊は、ドイツ軍の蛮行として、戦争中は反ドイツ・キャンペーンに利用された。そして戦後はルーヴァン図書館の再建のための賠償がドイツに課せられた。しかし敗戦国ドイツにとってその支出は不可能なほどに困難だ。そこで国際支援運動ということになって、これは国際連盟設立にもみられるように、戦後のいわゆる国際協調のムードにかなっていった。日本もこの事業に協力的で、1万5000冊の本をルーヴァン図書館に送っている。反対にベルギー側は後に東

大図書館復興のために王立学士院を通して7500冊の本を東大図書館に寄贈、またそれに加えて寄贈された金員の一部で800万分の1の地球儀が制作されることになる。

アメリカではルーヴァン図書館復興アメリカ委員会が設立され、コロンビア大学総長にして共和党の黒幕ニコラス・マリ・バトラーがその委員長に就任した。ベルギーのために慈善献金を集めることはさほど困難ではないようにバトラーには思われたが、実際にはうまく集まらなかった。50万ドル集めると大言壮語しておきながら14万ドルほどしか集めることができず、バトラーはともかくも集めた寄付金を1920年にベルギーに払い込んで自分の義務は終了したと宣告するのである。結局ルーヴァンの新図書館が落成式典にまで漕ぎつけるのは1928年7月4日であった。東大の新図書館の式典は同年の12月1日である。燃えた年には9年もの差があるのに、できた年は同じなのである。

ロックフェラーが、長引いているルーヴァン再建の状況を見過していたはずがない。いくら集めると宣言してみせたり、完成まで歳出につきあうよりも、できる寄付を一度に済ませてしまった方がよいと判断したことは想像に難くない。バトラーの二の轍は踏むまい、というわけである。またもうひとつ興味深い点としては、バトラーがJ・P・モルガンおよびアンドリュウ・カーネギーの顧問でもあったということである。ロックフェラーが東大図書館への寄付を成功裡に収めることは、モルガンやカーネギーといった他の財団に対して優位な名声を世間から得ることを意味してもいたのではないだろうか。実際、モルガンも図書館購入金を東大図書館に寄贈しているのだが、ロックフェラーの寄付金のことは知られていてもモルガンの寄付金のことは知られていないというのが実情であろう。

#### ウッツの夢、姉崎の夢

1914年8月25日というルーヴァン大学図書館が燃えた日付にもう一度戻ろう。姉崎はルーヴァン炎上の報にどう接したのだろうか。「姉崎先生のドイツ嫌いはかねがね相当のものでしたから、このときも定めしルーヴァン大学の典籍焼失に

は、先生も大いに憤慨されたことと想うのであります」<sup>(25)</sup>と水野亮は述べている。ところで姉崎はルーヴァンのニュースにリアル・タイムで接したとすると、日本でそのことを知ったことになるのだが、それはこのときたまたま夏期休暇で日本に一時帰国で戻っていたからで、1913年から15年という時期は姉崎はハーバードで講義をしており基本的にはアメリカで過ごしている。

先にも触れたが、姉崎をハーバードに呼ぶために尽力したのはほかならぬジェームズ・ウッツだった。この招聘にはドイッセン以来の2人の友情があったということももちろんだが、ウッツはウッツで思惑があったようで、それはインド学者・仏教学者としてウッツがハーバードにおける東洋研究の方面を充実しようとしていたということである。そしてそのときロックフェラーの基金を頼みにするということがあったようである。

1923年6月11日、関東大震災が起こる80日ほど前であるが、ウッツは姉崎に手紙を書いている。その手紙では、大略以下のようなことが述べられている。

中国政府の申し入れで、ハーバード大学ではいくつか中国にかんする教授職を設け、中国関係の書籍も購入していくことになった。それはロックフェラーの出資で行われることになっている。これを日本に対する差別と取ってほしくない。こないだそう佐分利氏<sup>(26)</sup>に申し上げたら、同じような申請を日本がハーバードに対してしてみたらどうかということをお大使が日本政府に勧めたようで、僕もそうなればいいと思う。こんなことをみんなきみに打ち明けるのも、僕らが仏教についていくつか本を出すのに若い日本の日本の仏教学者に手伝ってもらいたいからなんだ。もし正見〔姉崎正治の長男〕がハーバードに来るようなことがあったら熱烈に歓迎するよ。<sup>(27)</sup>

この書簡が重要と思われるのは、震災前の時点ですでに、ウッツが日本との関係でロックフェラーの金を使おうと思えば使うことができたということ想像させてくれる点である。そしてその裁量で、いざ地震が起こって図書館を復興するようになったときにそちらへまわしたのではないかとということが推測される。

そしてこの書簡に対応する姉崎からの返信もまた興味深い。日付は7月6日で地震はまだ起こっていない。この手紙には次のようなくだりがある。

正見はいま東京の私立大学で勉強しているところだ。私の大学に入るために必要な関門である高等学校には入れなかったのだ。正見をハーバードに送るといふ希望を私は諦めていないけれど、いまは状況からいってそうするのは難しい。徴兵もあるし、私もお金の都合がつくかどうか。きみがどれだけ正見のことを思っていてくれて、ハーバードで彼の生活の計画を立ててくれたか、〔感謝が〕言葉にならない。いつか私と正見できみの好意とハーバードの寛大さに沿うことができる日が来ることを望んでいるよ。正見は法政大学で4年勉強するから、4年たったならこの期待を実現すべく望むこともできるだろう。(28)

姉崎は震災の直前、ハーバードに再び(今度は長男と一緒に)行くことを漠然と夢見ているようでもある。もちろん実際には地震が起こってそれどころではなくなった。けれどもこのはかない期待が別の形で後年実現されることにもなって、姉崎は晩年の「短い自叙伝-シャーレイのふもと」や『わが生涯』所収の「最も多幸なる年月」では、自分の人生で一番幸せだった日々は家族と外遊したときの思い出だということを書いている。(29) 淡く思い描かれた外国生活と、現実の課題としての図書館復興。後年実現された家族との外遊は、前者の代替的な実現として、姉崎に幸福感を醸し出してくれたのかもしれない。

#### 移民法の代償あるいは日米間のネットワーク

ここでは、先に触れておいた、ロックフェラーの援助がなされようとしていたプロセスでもちあがっていた、日本における反米感情について検討しよう。アメリカでは1924年、排日の名を冠して呼ばれる移民法が成立し、日本のなかで反米感情が高まりを見せていた。(30) 図書館寄付の背景として日米間にはこのような状況があったのである。

1924年5月26日、アメリカ。この日、新移民法案がクーリッジ大統領の署名を受けて成立、7

月1日から施行に移される。この移民法は帰化不能外国人の入国禁止条項を含むもので、当時の文脈からして実質的には日本人移民の入国を禁ずるものと言えた。いわゆる排日移民法として知られるゆえんである。

ハワイやカリフォルニアへの日本人移民は、数量的にみても、その共同体的に強固な連帯感をみても、19世紀と20世紀の転換期頃から目立っていて、それが日本の国力伸張とも歩調をあわせていたものだから、アメリカは警戒感を強めていた。そこで1908年セオドア・ルーズベルト大統領は日本と紳士協約を結んで、日本人移民を規制することになる。以来この規制のもとで細々と移民は続くのであるが、1917年のロシア革命は移民労働者を赤の脅威としばしば結びつけるようになり、また他方では第一次世界大戦後の景気が1920年以降後退したこともあって、移民に対する風当たりは強くなっていた。

移民法案は賛成圧倒的多数で、1924年4月12日に下院を、15日に上院を通過する。同法が実施に移されれば日米貿易も甚大な影響を被ると心配した渋沢栄一ら経済界の有力者は、これを受けて移民法阻止の運動を起こした。

アメリカ側でも少数ながら移民法に反対する人びとがいた。駐日アメリカ大使のサイラス・E・ウッズ(1861~1938)もそのひとりである。(31) サイラス・ウッズは1923年3月3日、駐日アメリカ大使として来日、赴任後まもなく起こった関東大震災の際にはアメリカ赤十字を通じ多大の援助活動を行った。彼は新移民法の報に接して、異議を唱えヒューズ国务長官に抗議文を送りつけている。結局この移民法のために大使を辞任、7月21日に帰国する。

アメリカ国内で日本人排斥反対の指導的立場にあったのは、シドニー・L・ギューリック(1860~1945)である(帰国後の元駐日アメリカ大使サイラス・ウッズはギューリックとコンタクトを取って協力している。(32) 彼は宣教師として長いあいだ日本に滞在し、帰国後も親日家として知られていた。彼は移民法を阻止すべくアメリカの聖職者たちに呼びかけて反対運動を組織したのである。

このギューリックという人物は、実は渋沢栄一

とつながっている。渋沢は怪しい雲の立ち込める日米関係を調整しようと1916年日米関係委員会を組織していたのだが<sup>(33)</sup>、ギュリックはこの委員会の幹事なのである。だが2人の関係はもっと古い。そしてそこに姉崎も噛んでくる。

日本女子大学の創設者である成瀬仁蔵が中心となって姉崎正治・渋沢栄一らの学者・実業家によって1912年婦一協会が結成される。同会は日本国内の精神的統一を図りつつ、外国の同志とも協力していくことを企図しており、シドニー・ギュリックはこの会のメンバーだったのである。<sup>(34)</sup>

そしてギュリックは姉崎とのあいだに多くの書簡を交わしている。<sup>(35)</sup>1910年代から、アメリカにおける排日ムードについて遺憾な気持ちを表明しながらその状況を逐一、姉崎に報告しているのである。法案成立後も、今後は議会に修正を求めていくと訴えている。たとえば1925年1月1日にギュリックから姉崎に宛てられた手紙には、ギュリックがその一員であるFederal Council of Churches of Christ in Americaの1925年の活動プログラムが同封されていて、そこには「日本との正常な関係の再建」という項が盛り込まれている。<sup>(36)</sup>

このように悪化してゆく日米関係に懸念を表していたギュリックは、1927年3月3日の雛祭りに間に合うように、日本に向けて青い目の人形を発送している。<sup>(37)</sup>日米親善のためにアメリカの児童から日本の児童に人形を贈呈してはどうだろうというわけである。姉崎宛ての書簡にもこの企画の趣意書が同封されている。<sup>(38)</sup>同年のうちに全国に配布された人形は1万数千体にもものほった。ギュリックにしてみれば、移民法を通してしまっただけ日本人に申し訳ないことをした、何とか力になれないものか、そう考えたのではなかっただろうか。その思案の結果が人形の贈り物だったということなのだろう。

アメリカから贈られてきた人形へのお返しとして、日本からも日本の人形を贈ることになった。このとき渋沢栄一もその討論に加わっている。この人形は11月4日—アメリカからの人形が雛祭りに間にあうように発送されたとする日本側はクリスマスに間にあわせようとしたということだ

ろうか—アメリカに向けて発送される。

それから一年あまり経った1928年11月21日、今度は姉崎正治が個人的にアーサー・ウッズの娘のために一体の人形を発送している。着物で着飾ったこの人形にはサダという名前がつけられていて、命名したのは姉崎の娘である。発送はやや遅れた。「ちょうど昨日、娘たちの人形で名前はサダというのだが、それが出港してきみの娘さんのところへと向かった。残念だけどクリスマスには間にあわないかもしれない」<sup>(39)</sup>

太平洋をはさんで

それから一週間ほど経った1928年12月1日、東大図書館は新しく生まれ変わり竣工式を迎えることになる。総長古在由直は病気で演説も困難になっていたので山田三良が代理で総長の言葉を読み上げている。各国の高官も招かれた。けれどもアメリカからは参加がなかった。

1928年12月14日、姉崎正治は熱海市伊豆山に向かっている。竣工式からおよそ2週間、閲覧開始は4日前からはじまったばかりで、移転作業も途中の段階と、まだまだ落ち着かないが、図書館再興という重大な任務が一段落ついたというわけで、小休暇のつもりである。翌日、姉崎は図書館再建に協力してくれたジョン・D・ロックフェラー、アーサー・ウッズ、ジェームズ・ウッズに報告かたがた手紙をしたためる。<sup>(40)</sup>

ウッズ兄弟にしたためた手紙はだいぶくだけた調子である。アーサーに宛てた方にはこうある。「私の泊まっているホテルは坂道にあって、部屋からは外に太平洋が見える。そして私の思いは海を越えてゆく。今頃あの人形はパナマ運河を通過している頃だろう。きみの子供たちがかわいがってくれればと思う」<sup>(41)</sup>。ジェームズの方にはこうある。「新図書館の竣工式から2週間が過ぎて、いま私は伊豆山という温泉街にいる。…私の部屋からは、そして風呂からも、外には太平洋が大きく開けているのが見える」<sup>(42)</sup>。

これらはただの報告と描写ともとれるがたとえば次のようにもとれる。海の向こうにはアーサー、ジェームズ、きみたちがいる。けれども私たちが隔てている海の距離は大きい、と。日米間には一方では私たちのような友情の架け橋がある。けれ

ども他方ではそのあいだに怪しい雲が立ち込めてもいる、と。

人形。それは友情のしるしであり、また日米友好への希望の象徴だったのかもしれない。そして図書館も人形と同様のネットワークと精神構造に支えられていたのではないだろうか。親日派による移民法の埋めあわせというわけである。悪くなってゆく日米間の状況のなかで、かろうじて保たれている有力者や知識人のネットワークという構図が両方のケースに共通している。(43)

### 結語—図書館事業と姉崎正治

以上、姉崎正治による東大図書館の復興事業を当時の国際状況という背景とともに理解することにつとめてきた。まずは、震災後図書館長になった姉崎とロックフェラーのやりとりを描き出し、それとともに出資元のロックフェラーの心理や、姉崎が震災以前どのようなことを考えていたのかを考察した。そしてアメリカで排日移民法が通過し日米関係が険悪になるなかで、それを食い止めようとしていた日米間のネットワークの一角を姉崎ならびに彼と交友関係を保っていた人物が占めていたことを示し、人形と図書館をパラレルに考えながら、東大図書館復興事業を反排日法的な友好関係の表明と受け止めることができるのではないかという見解を示した。最後に姉崎正治の図書館事業にかんして残されている課題を述べながら論を締めくくろう。

本稿では東大図書館に焦点を当ててきたが、姉崎と図書館のかかわりは東大図書館に限られた話ではなくて、姉崎は日本図書館協会の理事も務めたし、天理図書館新館の建設の際にも意見を求められている。(44)『図書館雑誌』にも1930年から1941年まで、折に触れて寄稿している。

こうした過程で姉崎はやがて図書館が社会においていかなる役割を果たすべきか、そのために日本の図書館はどうあるべきかといったことを考えるようになってゆく。図書館は単に書物を保存・貯蔵するだけでなく、供給・流通を管理することもその任務であるというのが姉崎の基本的な考えで、そしてこれには昭和初期の円本の登場と読書の流行に対する憂慮があるようである。

たとえば「有形の図書館と無形の図書館」にお

いて姉崎は次のように述べている。

日本は出版物の数に於ては世界で一二を争ふ位になつてゐるが、品質内容は必ずしも其に相応せず、又公衆が之を利用する方法設備に於ては、世界での第二流国にも劣る位である、第一に図書収集貯蔵と利用分配との社会的設備が欠乏してゐる、第二に、新刊書に対する批判撰択の社会的指導が甚だ貧弱である。…〔そこで〕公共図書館が、図書の撰択には重要な位置をしめるべきである。…〔そういうわけで〕我邦読書界の欠陥をため直すには、先づ社会的設備として公共図書館を完備することが急務である、即ち書物の配置利用と撰択淘汰とに於て図書館の職務を発揮する必要がある。(45)

また「知識の追求と生命の問題」ではこう述べている。

現在の動向、これを数へれば随分澤山ありませうが、読書熱といふこと、知識を求める傾向、これをその一つと数へて差支へなからうと思ひます。しかし私はときどき…私の方から学生諸君に向つて、あまり澤山読まうと思ふなといふことを申す事もあります。…現在におきましては、青年諸君は世の中の刺激が多い為、知識を求める傾向が非常に強い。…そこで円本の洪水、全集の氾濫、乃至はその地震のやうなものも生ずるのであります。書物を読んで知識を求めるにしても、あまりに慌しい。(46)

あまり本を読みすぎるものではない。書物で得た知識を実人生において活かしていけないと、かえって害悪を招くことになる。図書館はそういうわけで、由緒正しい書物を読者に供給するべく任に当たることが望ましい、というのが姉崎の基本的な考え方ようである。

姉崎はこの考えを制度的にも反映させようとしている。東大図書館に指定書制度を設けることを立案検討し実施に移すのである(1929年から)。この制度は館内に特別の場所「指定書閲覧室」を設け、そこに各教官が担当講義に直接かかわりかつまた学生にとって有用と思われる図書で前もつ



て指定しておいたのを備えつけるという制度である。この制度は単に姉崎が作った制度として興味を引くだけでなく、姉崎の書物に対する態度を反映している点、ひいては姉崎の（あるいは姉崎の世代の）いわば知の構造を物語っている点でも興味深いし、そのような制度のもとで学生の知的営為が営まれていたことを思えば学生たちの知の構造をある程度規定することにもなっていたわけだからその点でも興味がそそられるのだが、これについては指定書制度のもとでの学生の読書生活について具体的に検討していくことが必要になるだろう。

このような側面からは、姉崎の一面的な姿だけではなく、その奥に姉崎の全体的な姿が仄見えてくる。図書館事業を姉崎の業績から部分的に切り出してくるのではなく、姉崎の全体的な業績とかかわらせながら検討することが必要だと思われる。

姉崎正治は後年、自分が図書館復興事業に携わることになろうとは思ってもよらなかったと回想している。「図書館の事は、実に自分としては全く予期しなかったことである」<sup>(47)</sup>。だが偶然降りがかった事件というものは予測どおりのことより

もえてして深い影響を残したりもするものだし、姉崎は予期せぬ事態にきちんと対処できる意識をもちあわせていた。というのも、図書館再建中の1928年の正月を迎えたとき、姉崎は次のように述べているのである。

自分一個の研究思索は、大部分これを犠牲にし、今後少なくとも二三年は同様であろうから、学者として、はがゆく思う事もあるが、これ位な犠牲は当然の事と甘受し、大地震が自分の生涯の上にもたらした一大回転として、勇んで復興に勉めたい。<sup>(48)</sup>

それゆえ、もし図書館事業にかかわらなかつたらどれだけ研究が進んだかということに推理をめぐらすよりは、むしろ図書館事業にかかわったことがその後の姉崎の研学生活や価値観にどのような影響を与えたのかを探るべきであろう。研究態度や研究内容がそれ以前とそれ以後とでどのように変化しているのか、一貫性と断絶がどのような点で観察されるのか、そういった観点から姉崎にアプローチしてゆく課題が残されていると言えるだろう。

## 【註】

- (1) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史部局史四』東京大学出版会、1987年、p1210。
- (2) 姉崎正治「大学図書館の再建」姉崎正治（姉崎正治先生生誕百年記念会編）『新版 わが生涯』姉崎正治先生生誕百年記念会、1974年、p106、121。
- (3) 水野亮「姉崎図書館長の思い出」姉崎正治先生生誕百年記念会編『姉崎正治先生の業績-記念講演集・著作目録』姉崎正治先生生誕百年記念会、1974年、p73。
- (4) 男澤淳「図書館復興と姉崎館長」東京大学附属図書館編『図書館再建50年』東京大学附属図書館、1978年。
- (5) この資料は東京大学総合図書館に所蔵されている。
- (6) 東京大学宗教学研究室蔵。資料整理は日本女子大学に委託されている。この資料のうち図書館行政のセクションに分類されるのは以下10点余りの資料である。整理番号、資料形態、タイトル（内容）の順に記しておく。11-0-6-4（覚書）帝国大学図書館不備のそしり、11-0-6-7（抜刷＝切抜）天理図書館についての感想、11-0-6-9～11（原稿）日本国内外の図書館蔵書料等の覚書、11-0-6-12（原稿）図書館の社会的使命、11-0-6-15（抜刷＝新聞切抜）「書架に埋もれてライブラリアンの手記」、11-0-6-16（抜刷＝新聞切抜）「図書館内の脱帽」（『帝國大學新聞』352号（昭和5年9月22日））、11-0-6-19（抜刷）「図書館の社会的使命」（『圖書館雜誌』133号（昭和5年12月））、11-0-6-21（覚書）天理図書館所蔵宗教関係書目録、41-0-20-2（小冊子）「年の始の御祝いを申し上げむがため我が大学図書館復興について所感を述べ復興状態の写真を御覧に供す」、41-0-20-3（小冊子）「年の改まるに祭り記詞を申し上げますとともに図書館近状の御報」

- (7) 東京大学宗教学研究室蔵。資料整理は一橋大学に委託されている。姉崎発、または姉崎宛の欧文書簡をまとめたもので、点数は300点を越える。
- (8) たとえば Russell T. McCutcheon, *Manufacturing Religion: The Discourse on Sui Generis Religion and the Politics of Nostalgia* (Oxford University Press, 1997.) はこのような観点からエリアーデを扱っている。
- (9) 震災までの東大図書館の沿革を簡単に辿っておこう。1881年6月、東京大学図書館規則が制定され図書課・図書課取締がおかれた。1882年、書庫および閲覧室の増築が着手され、翌年落成した。1886年10月、帝国大学図書館規則が制定される。1890年10月、図書館建設が起工される。1892年8月18日図書館が落成、翌年7月5日に移転を完了する。1897年6月、帝国大学図書館を東京帝国大学図書館と改称する。このとき館長が設置される。
- (10) 【図書館再建50年】 p28
- (11) 同上 p25
- (12) 各国ならびに国内の支援や同情運動については、東京帝国大学【図書館復興事業】(1930年)に詳しい。
- (13) 【わが生涯】 p121
- (14) 【わが生涯】 p121
- (15) Rockfeller Documents, p1
- (16) 1924年8月9日姉崎発 James Woods 宛 (Rockfeller Documents, p3)
- (17) 同上 (Rockfeller Documents, p3~4)
- (18) 斉藤博 (1886—1939) と思われる。1910年外務省に入省し、外務省きっての知米派として知られる。1934年からは駐米大使を務める。
- (19) 1924年8月23日姉崎発斉藤総領事宛 (Rockfeller Documents, p6~7)
- (20) 1924年9月15日古在発外務省宛 (Rockfeller Documents, p14)
- (21) だが結局これは出なかった。このことについては姉崎も後年こう歎いている。「…この建築について、はじめにロックフェラー氏に出した手紙では二百万円は日本政府から出る。それに四百万円を加えれば自分の考通りのものが出来るといつてやったが、寄付の分は出来たが、政府支出の分はちっとも出来ぬ。そのうち大学の支出がかさんだが、戦争などで出来なかったか。それにしても今日まで四百万円で出来たきりで、日本政府はそれに一文も加えずにある。この点は、寄付者に対して誠に申し訳ない話である。今後大学の当事者が多少余裕が出来たら、それを図書館に向けてほしい」(【わが生涯】 p125~6)。
- (22) 1924年12月30日 John D. Rockfeller Junior 発東京帝国大学総長古在由直宛 (Rockfeller Documents, p19~20)。ちなみにこの電報は現在でも東京大学附属総合図書館3階の一角で目にすることができる。
- (23) 1924年8月9日姉崎発 James Woods 宛 (Rockfeller Documents, p4)
- (24) ルーヴァン大学図書館の記述については、ヴォルフガング・シヴェルプシュ【図書館炎上——二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館】(福本義憲訳、法政大学出版局、1992年(原1988))を参照。
- (25) 水野亮「姉崎図書館長の思い出」【姉崎正治先生の業績】 p69
- (26) 佐分利貞男 (1879—1929) のこと。彼は外交官として1919年から24年までアメリカに在勤。ワシントン会議、日本移民法問題に活躍した。謎の自殺を遂げる。
- (27) 1923年6月11日 James Woods 発姉崎宛書簡 (一橋大学「姉崎発・姉崎宛欧文書簡集」)
- (28) 1923年7月6日姉崎発 James Woods 宛書簡 (一橋大学「姉崎発・姉崎宛欧文書簡集」)
- (29) 姉崎正治「短い自叙伝—シャーレイのふもと」【会館文化】5巻6号、1947年。姉崎正治「最も多幸

なる年月」『わが生涯』姉崎正治先生生誕百年記念会、1974年。

- (30) 排日移民法については、三輪公忠編『日米危機の起源と排日移民法』（論創社、1997年）などを参照。
- (31) ウッツの名は当然のことながらジェームズやアーサーとの結びつきを想定させるが、サイラス・ウッツとジェームズ&アーサー・ウッツとは血縁的に近い関係ではどうやらなさそうである。どのような接点をもっていたかも管見の限り不明。
- (32) 1925年1月1日 Sidney Gulick 発姉崎宛書簡（一橋大学「姉崎発・姉崎宛欧文書簡集」）
- (33) 1917年には日米協会（The America-Japan Society）というのもできている。両国間の親善を増進しようというこの組織の設立発起人に渋沢栄一も名を連ねている。
- (34) 帰一協会『帰一協会月報 第壱』1913年
- (35) 一橋大学の「姉崎発・姉崎宛欧文書簡集」によれば、ギュリックは姉崎に1914年12月から1933年1月まで17通もの書簡を送っている。この点数はジェームズ・ウッツ発の書簡の19点に次ぐ点数であることにかんがみても相当に多いことがわかる。
- (36) 1925年1月1日 Sidney Gulick 発姉崎宛書簡（一橋大学「姉崎発・姉崎宛欧文書簡集」）
- (37) 日米間の人形のやりとりについては、山口昌男「青い眼をした人形と赤い靴はいた女の子の行方-日米関係のアルケオロジー」『「敗者」の精神史』（岩波書店、1995年）を参照。
- (38) 1927年12月17日 Sidney Gulick 発姉崎宛書簡（一橋大学「姉崎発・姉崎宛欧文書簡集」）
- (39) 1928年11月22日姉崎発 Arthur Woods 宛書簡（Rockefeller Documents, p88）
- (40) 1928年12月15日姉崎発 John D. Rockefeller 宛書簡、姉崎発 Arthur Woods 宛書簡、姉崎発 James Woods 宛書簡（Rockefeller Documents, p99~105）
- (41) 1928年12月15日姉崎発 Arthur Woods 宛書簡（Rockefeller Documents, p102）
- (42) 1928年12月15日姉崎発 James Woods 宛書簡（Rockefeller Documents, p103）
- (43) 移民法以前の日米友好の具体的な結実として、東京帝国大学のヘボン講座（1918年設立）をあげることができるだろう。この時期にはまだ、1920年代に入ってからほど、両国の関係は悪化していないが、すでにアメリカでは排日の風潮が芽生えてはいた。こうしたなかでヘボン（A. Barton Hepburn、ヘボン辞書で知られる宣教師ヘボンの遠縁に当たる）は12万3000円の基本金を東京帝国大学に寄附して、それによってアメリカの歴史・憲法・外交についての講義を行い、日米両国間の友好的関係を築くことを目的とするヘボン講座を設置したのである。これはアメリカの東京帝国大学に対する援助として、ロックフェラーの先例の位置に系譜的に位置づけることもできよう。ヘボン講座の設置については、大澤章「或る人の仕事」『丘の書』（岩波書店、1938年）参照。
- (44) これには天理の中山正善（真柱）が姉崎の教え子だったということがかかわっている。姉崎は東大図書館のときには、建築委員会の建築家でのち東大総長になる内田祥三と意見が合わずに衝突したりもしているので「自分としては、図書館としては天理図書館の方が余程よく出来ていると考える」（『わが生涯』p123）と述べている。
- (45) 姉崎正治「有形の図書館と無形の図書館」『図書館雑誌』31—12、1936年
- (46) 姉崎正治「知識の追求と生命の問題」『図書館雑誌』27—8、1933年
- (47) 姉崎正治「大学図書館の再建」『我が生涯』p126
- (48) 姉崎正治「年の始の御祝を申し上げむがため我が大学図書館復興について所感を述べ復興状態の写真を御覧に供す」1928年（日本女子大学『姉崎正治関連資料』41-0-20-2）

#### 【追記】

本論文の作成に当たっては、日本女子大学総合研究所、東京大学宗教学研究室ならびに東京大学附属図書館からいろいろと資料を提供していただいた。記して謝意を表したい。